

特別速報レポート

2005 年 3 月 17 日

第 135 回 OPEC 総会の決定と国際石油情勢について

(財)日本エネルギー経済研究所

総合エネルギー動向分析室長 小山 堅

はじめに

2005 年 3 月 16 日、イランの Isfahan において第 135 回 OPEC 総会が開催され、生産枠の即時 50 万 B/D 引上げ、および必要に応じて追加的な生産枠 50 万 B/D 引上げが決定された。本総会直前に至るまで国際石油市場における原油価格高騰が続き、総会前日の 3 月 15 日には指標原油 WTI の先物価格が 55 ドル台まで上昇していただけに、本 OPEC 総会の帰趨が注目を集めていた。以下では、OPEC 総会における決定の内容、決定に至る背景要因と国際石油市場の現状、今後の展開について特別速報としてとりまとめる。

1. OPEC 総会における決定の内容

本 OPEC 総会における主要な決定事項の概要は以下の通り。

- 現行生産枠 (2700 万 B/D) を即時 50 万 B/D 引き上げ、2750 万 B/D とする。
- 原油価格が引き続き現状の高水準で推移あるいはさらに高騰する場合、OPEC 議長に対して、加盟国メンバーと相談の上で次回 OPEC 総会までの期間中について追加的に 50 万 B/D の生産枠引上げを決定することを認める。
- OPEC は今後とも国際石油市場と原油価格の動向をモニターし続け、必要に応じて適切な行動をとる。その一環として、2005 年 6 月 7 日にオーストリア・ウィーンにおいて臨時総会を開催する。また 2005 年 9 月 19 日にはオーストリア・ウィーンにおいて通常総会を開催する。
- 従来 7 油種 (OPEC 原油 6、非 OPEC 原油 1) で構成されてきた OPEC バスケット価格の基準となる油種構成を変更し、新たに 11 油種を基準とする。その 11 油種は、各加盟国の代表的な輸出原油から選択され、計算にあたっては、各油種の生産量と主要市場向けの輸出量によって加重平均を行う。OPEC 事務局は、現状ベース (7 油種) でのバスケット価格の計算と平行して、新油種 (11 種) での新バスケット価格の計算を試験的に開始し、次回総会にその結果を報告する。その結果報告を基に、新バスケット価格制度の開始時期を決定する。

2. 決定の背景

- 本総会の開催前は、多くの市場関係者は、現行生産枠は変更されずそのまま延長される可能性が高いと認識していた。しかし、現実には、総会直前になってサウジアラビア・ナイミ石油鉱物資源大臣から生産枠引き上げが提案され、そこから生産枠引き上げをベースとした議論が総会で行われ、結果として上述のような増産決定となった。
- OPEC は、自らの市場分析において述べている通り、現在の国際石油市場には全体として供給は十分であり、OECD 石油在庫のレベルも過去 5 年平均水準まで回復しているという意味において、問題ないレベルと見ている。それにもかかわらず、原油価格が大幅に高騰している原因は、寒波による需要の急増、今後の需要増に関する期待、先物市場への投機資金の流入（図 1）、石油下流部門におけるボトルネックの存在、地政学的リスク要因の存在、等によると OPEC は分析している。
- 上述の通り、現時点で供給が不足している状況には無いと考えながら、今回の増産決定に至った主な理由は以下の通りであると考えられる
 - 世界の石油需要が予想以上に堅調に増大しており、2005 年後半以降さらに需要水準が高まると考えられていること。実際、OPEC だけでなく、IEA も 2005 年に入ってから 3 回連続で世界の石油需要見通しを上方修正している（図 2）。2005 年 3 月発表の IEA 見通しでは、前月発表の見通しと比較して 2005 年の世界の石油需要を 33 万 B/D 上方修正し、対前年比 181 万 B/D 増の 8432 万 B/D になるとしている。
 - その反対に、非 OPEC の生産見通しについては、最近になってより慎重な見方が広がっている。ロシア等の増産スピードに陰りが生じつつあるのではないかと懸念等の下、非 OPEC 生産見通しは下方修正されている。例えば、IEA は 2004 年末時点では、2005 年の非 OPEC 増産分を 116 万 B/D と想定していたが、2005 年 3 月見通しでは 92 万 B/D へと引き下げた。
 - その結果として、OPEC 原油への需要が当初の予想以上に増大している。
 - また、2005 年後半の需給バランスを考えると、現在から供給を増加させないと、年後半にかけて在庫レベルが大幅に低下し、市場の不安定化・原油価格の一層の高騰を招きかねない事態が懸念される。
 - また、現実に原油価格が大幅に高騰しており、そのまま放置すると世界経済への悪影響等を通して、最終的には OPEC 原油への需要にネガティブな影響が考えられる。そして、OPEC としては国際石油市場の安定化に従来からコミットしており、その姿勢を堅持していることを内外に示すことが重要であると考えた可能性がある。
- OPEC バスケットの基準油種変更については、OPEC の目的は石油価格の安定化（防衛）であり、それは加盟国の石油収入の安定化（防衛）のためであるが、従来の OPEC バスケット価格は、OPEC 加盟国の石油収入を検討する際の価格基準として不適切である

との意見が広がっていた。そこで、加盟国にとって、上記の面で実態をより反映する代表油種が模索されていたことが、今回の決定の背景にあると考えられる。また、前回の第 134 回総会において、現在の OPEC バスケット価格のプライスバンド制が停止されたため、今後、目標価格レンジの議論を行うことになる。しかし、目標価格の設定は、OPEC にとっても調整が必要な微妙な問題であり、決定までには慎重さと時間を要するため、この問題に関して、まず基準原油としてより適切な油種構成を選択し、その後、その新制度に基づいて、目標水準の議論を実施するという「2 段階方式」を取ったものと考えられる。

3 . OPEC 決定の影響と今後の国際石油情勢

- OPEC 増産決定が発表された後も原油価格は上昇し、3 月 16 日の NYMEX では WTI 原油は前日比 1.41 ドル高の 56.46 ドルと、2004 年 10 月 22 日に記録した過去最高値(終値ベース、55.17 ドル) を一気に更新した。
- OPEC 増産決定にもかかわらず、原油価格が上昇した原因は、最新の米国石油在庫統計の発表で、原油在庫は増加したものの、ガソリン・暖房油等の製品在庫が前週比で減少したため、特に今後のドライブシーズン入りを前に製品(ガソリン) 需給の逼迫に関する思惑がより強く作用した可能性がある。
- また、今回の OPEC 増産決定そのものに関しても、以下のような問題点から、即効的な効果を持ち得なかったと考えられる。
 - 50 万 B/D の即時増産については、既に OPEC10(イラク除く) の生産量は現行生産枠(2700 万 B/D) を大きく超過しており、生産枠の増加が現状追認に近い結果(実際の生産量の大幅増加に直結するかどうか不明) になる可能性があること
 - 生産枠を増加させても、実際に生産量を拡大させることのできる産油国(余剰生産能力を有する産油国) は、OPEC10 の中ではサウジアラビアのみであるといって良い状況にあること(表 1)
 - 実際にサウジアラビアを主力として、生産量をさらに拡大することになった場合、生産能力が現状のままであれば、国際石油市場における余剰能力がさらに低下し、不測の事態発生等の場合に対する市場の脆弱性が一層高まるという「副作用」があること
- 当研究所は、2004 年 12 月に開催した第 390 回定例研究報告会において「2005 年の国際石油情勢と原油価格の展望」を発表し、その中で、基準ケース、高価格ケース、低価格ケースの 3 つの見通しを示した¹。その見通しに関しては、現状の国際石油情勢を見ると、世界の石油需要が予想以上に堅調に増大する、非 OPEC 生産は予想外に低迷する、投機資金が大量に流入する、等との前提条件をおいた高価格ケースに近い展

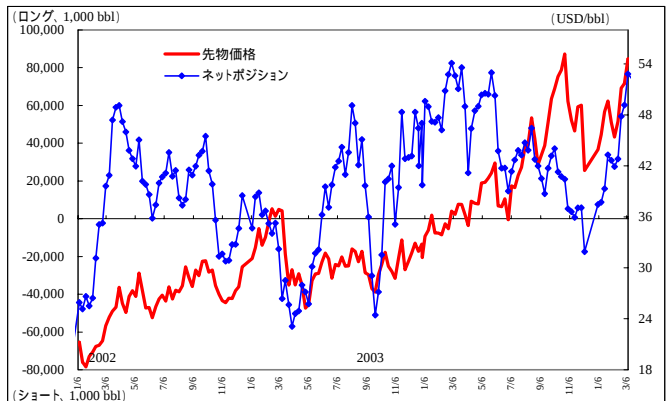
¹ 本見通しの詳細については、当研究所ホームページ
(http://eneken.ieej.or.jp/whatsnew/390_ko.htm) を参照されたい。

開となっているといえよう。この高価格ケースでは、上述のような需給前提の下、国際石油市場では需給逼迫感が持続し、その結果として 2005 年の WTI 平均価格は 48～50 ドルに高止まりすると想定している。また、この高価格ケースでは、主要産油国等での供給不安の発生等に応じて、著しい価格変動（高いボラティリティ）が発生するとも想定している。最近の価格高騰に関しては、特段の供給不安の発生が無い状況での事態だけに、逆に、今後、主要産油国において何らかの供給不安・支障が発生するような場合、今まで以上の大幅な価格高騰が生ずる可能性も懸念される。いずれにせよ、現在の需給環境から見て、当面は現状並みの高価格水準での展開となる可能性が高い。

- 今後の国際石油情勢には多くの不確定要因が存在し続ける。中国を中心とした石油需要の伸び、非 OPEC 増産の状況、投機資金の流入状況、主要産油国での供給不安の発生状況、等の要因の展開次第で、国際石油需給バランスや原油価格は大きく変動していくことになる。こうした状況下、OPEC の生産・価格政策の展開が大いに注目されるが、同時に、今後の生産能力増強に向けた OPEC の取り組みも極めて重要なポイントとなろう。今回の総会プレスリリースにも述べられているように、OPEC としては生産能力増強が緊喫の課題となりつつあることを十分認識しており、今後、生産能力増強が進捗する可能性は高い。しかし、能力増強のテンポ・規模に関しては、未だ不透明な部分が多く、その帰趨は 2005 年以降の国際石油情勢を左右する重要なポイントの一つとなる。

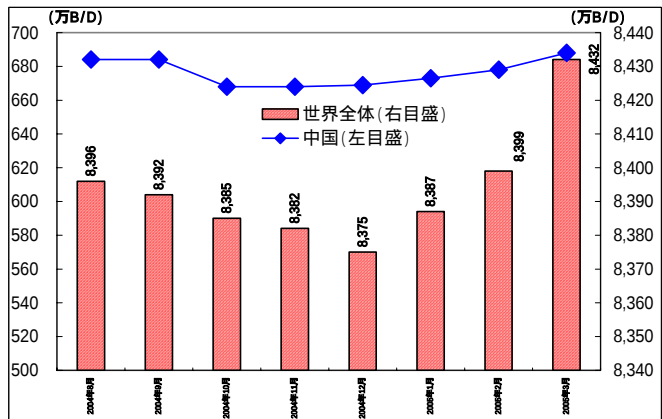
以上

図 1 NYMEX における非当業者取引（ネットポジション）と WTI 原油価格



（出所）NYMEX および CFTC 資料より筆者作成

図 2 2005 年の石油需要見通しに関する IEA 見通しの変化



（出所）IEA「Oil Market Report」より筆者作成

表 1 OPEC の原油生産状況

	原油生産能力 (1,000 B/D) (A)	2005年1月生産量 (1,000 B/D) (B)	余剰能力 (1,000 B/D) (A) - (B)	現行生産枠 (1,000 B/D) (C)	生産枠超過 (1,000 B/D) (B) - (C)
アルジェリア	1,350	1,340	20	860	470
インドネシア	1,000	970	40	1,400	(430)
イラン	4,000	3,980	30	3,960	10
イラク	2,500	1,850	660		
クウェート	2,500	2,450	50	2,170	280
リビア	1,650	1,620	30	1,450	
ナイジェリア	2,400	2,390	10	2,220	170
カタール	800	780	20	700	80
サウジアラビア	10,000-10,500	9,200	800-1,300	8,780	420
UAE	2,550	2,320	230	2,360	(40)
ベネズエラ	2,200	2,160	40	3,110	(950)
合計	30,950-31,450	29,040	1,920-2,420	27,000	20
OPEC(イラク除く)	28,450-28,950	27,200	1,260-1,760		

（出所）IEA「Oil Market Report」より筆者作成

お問い合わせ: report@tky.ieej.or.jp